

第13章

接続詞

第1節 接続詞の概要

1. 接続詞とは

「接続詞」とは、文字通り「2つのものを接続させる（つなげる）品詞」のことです。接続詞には「等位接続詞」と「従位接続詞（＝従属接続詞）」の2種類があります。

等位接続詞は「語と語」「句と句」「節と節」を「同格」でつなげます。

従位接続詞は「従位節（名詞節または副詞節）」を導きながら、その節を「主節」につなげます。

（★「複数の語を『同格』で並べる場合」→ P. 403 参照。）

（★「従位節」および「主節」→ P. 17 参照。）

2. 等位接続詞と従位接続詞

(1) 等位接続詞：「語と語」「句と句」「節と節」を「同格」でつなげる

等位接続詞には「and」「but」「or」「nor」「so」などがあります。等位接続詞は原則的に「語と語」「句と句」「節と節」を「同格」の関係にしてつなげます。等位接続詞が「節と節」をつなげる場合、つなげられたその2つの節はどちらも「等位節」と呼ばれます。

（★「等位節」→ P. 16 参照。）

例1：You and I are good friends. 「あなたと私は良い友達です。」

（「You」と「I」の2つの「語」を同格でつないでいる。）

例2：I did this for you, and of course, for myself.

「私はあなたのために、そしてもちろん私自身のためにこれをしたのです。」

（「for you」と「for myself」の2つの「句」を同格でつないでいる。）

例3：I knocked on the door, but no one answered.

「私はドアをノックしたが、しかし誰も返答しなかった。」

（「I knocked on the door」と「no one answered」の2つの「節」を同格でつないでいる。）

(2) 従位接続詞：「従位節（名詞節か副詞節）」を導き、「主節」につなげる

従位接続詞は「従位節」を導いて、これを「主節」につなげます。「従位節」というのは、「**節全体で大きな1つの品詞**」として機能している節のことで、具体的には「名詞節」「形容詞節」「副詞節」の3つのことです。

（※「世界につながる英文法」サンプル・Copyright：株式会社デュープラー）

第2節 等位接続詞

1. 等位接続詞「and」の用法

(1) 等位接続詞「and」1:「そして」「と」(「順接」の意)

「and」は基本的に「順接」の意を表し、「語と語」「句と句」「節と節」を同格でつなぎます。また時には文頭に置かれ、「前の文と後ろの文」を意味的につなぐこともあります。

例1: I like fruits, especially apples and oranges.

「私はフルーツ、特にリンゴとオレンジが好きだ。」

(「apples」と「oranges」の2つの「語」を同格でつないでいる。)

例2: She lay there, closing her eyes and listening to music.

「彼女は目を閉じながら、そして音楽に耳を傾けながら、そこに横たわっていた。」

(「closing her eyes」と「listening to music」の2つの「句」を同格でつないでいる。)

例3: She ate beef and I ate chicken.

「彼女は牛肉を食べ、そして私は鶏肉を食べた。」

(「She ate ...」と「I ate ...」の2つの「節」を同格でつないでいる。)

例4: He called her name again. And in a minute, there was a loud scream.

「彼はもう一度彼女の名前を呼んだ。そしてすぐに、大きな叫び声があった。」

(「He called ...」の文と、「there was ...」の文を意味的に同格でつないでいる。

「but」や「or」や「so」なども同様に文頭に置かれて「文と文」を意味的に同格でつなぐことがある。)

(2) 等位接続詞「and」2:「そうすれば」(命令文に続けて「順接的な未来」を表す)

「命令文」の後ろに「and + S + V」が続く場合、「and」は「そうすれば」の意となります。

(★『命令文』に続く『and (または or)』の用法 → P. 29 参照。)

例: Study hard, and you will be rewarded.

「一生懸命勉強しなさい、そうすればあなたは報われるでしょう。」

2. 等位接続詞「but」の用法

(1) 等位接続詞「but」1:「しかし」(「逆接」の意)

「but」は基本的に「逆接」の意を表し、「語と語」「句と句」「節と節」を同格でつなぎます。また「and」と同様、文頭に置かれ、「前の文と後ろの文」を意味的につなぐこともあります。

例: He is surely rich, but I don't want to marry him.

「彼は確かに裕福である。しかし私は彼と結婚することを望んでいない。」

第3節 「名詞節」を導く従位接続詞

「**名詞節**」を導く従位接続詞には「**that**」と「**if**」と「**whether**」の3種類しかありません。原則的に「**that**」は「**確定的な事柄を述べる節**」に対して使われ、「**if**」と「**whether**」は「**不確定的な事柄を述べる節**」に対して使われます。

「名詞節」は文中において、主に「主語」「動詞の目的語」「補語」のいずれかとして機能します。

(★「名詞の基本的な働き」→P.31 参照。)

1. 従位接続詞「that」の用法 (名詞節を導く)

「**that**」から始まる従位節は、一般的に「**that 節**」と呼ばれます。「that 節」は「**事実**」や「**確定的な事柄**」を表し、「～するということ」の意の「名詞節」となります。

(1) 従位接続詞「that」1:「～するということは／が」(「主語」としての機能)

「that 節」が「**主語**」になる場合は、原則として「**形式上の it**」が文頭に置かれ、本当の主語の「that 節」は後ろの方に置かれた形となります。

(★「形式上の『it』」→P.61 参照。)

例: It is shown in this picture that he met her at the station.

「彼が駅で彼女に会ったということがこの写真に示されている。」

(「that 節」全体が述語動詞「is shown」の「主語」として機能しているが、形式上の主語(S)として「it」が文頭に置かれ、「that 節」の部分は後置されている。)

(2) 従位接続詞「that」2:「～するということを／に」(「動詞の目的語」としての機能)

「that 節」が「**動詞の目的語**」になる場合、「that」自体は頻繁に省略されます。特に口語では「that」は省略されるのが一般的であり、逆に省略されないと堅い表現に聞こえる場合もあるので注意しましょう。(ただし必ず省略されるということではありません。)

例 1: I know (that) this watch was made in Germany.

「私はこの時計がドイツで作られたということを知っている。」

(「that 節」全体が述語動詞「know」の「目的語」として機能している。「that 節」が「動詞の目的語」となっている場合の「that」は省略されることが多い。)

また「that 節」が第5文型「S + V + O + C」での「O」となる場合には、「形式上の it」が目的語の位置に置かれ、本当の目的語の「that 節」は後ろの方に置かれた形となります。

(★「形式上の『it』」→P.61 参照。)

例 2: I found it stupid that I had to do it for him.

「私は私がそれを彼の為にしなくてはならないということが愚かだと気づいた。」

(「that 節」全体が述語動詞「found」の「目的語」として機能しているが、形式上の目的語(O)として「it」が本来の目的語の位置に置かれ、「that 節」の部分は補語(C)よりも後置されている。この場合の「that」は通例省略されない。)

第4節 「副詞節」を導く代表的な従位接続詞

従位接続詞によって導かれた副詞節は、「1つの副詞」として機能し、文中の「動詞」や「形容詞」や「副詞」などを修飾します。

副詞節は、全体で「副詞」、つまり「修飾部分(M)」となりますから、必ずしも主節より後ろに置かれるとは限らず、主節よりも前、あるいは主節の途中に置かれることもあります。

また、副詞節を導く従位接続詞の中には「前置詞」としても機能するものがあります。同じ語でも、従位接続詞の場合は後ろに「主語(名詞・代名詞) + 述語動詞」という「節」の形が続きますが、前置詞の場合は後ろに「名詞・代名詞」のみが置かれます。両者の違いは「述語動詞」、つまり「動詞」が「名詞・代名詞」のさらに後ろに置かれるかどうかとなります。そこで従位接続詞を日本語に訳す際は、必ず「～する」のような表現をつけるようにし、「動詞」が後ろに置かれることをほのめかして前置詞と区別するようにすると良いでしょう。

1. 従位接続詞「when」の用法

(1) 従位接続詞「when」1: 「～する時」(「現在」や「過去」における「同時」の意)

「when」は、基本的に「同時」を表します。「when」が「現在」や「過去」における「同時」を表す場合、「when」から始まる節の中の述語動詞の時制は、原則的には主節の述語動詞と同じ時制(つまり、「現在形」か「過去形」)になります。

例1: My dog always barks when somebody comes to my house.

「誰かが私の家に来る時、私の犬はいつも吠えます。」

例2: The phone rang when I got home.

「私が家に着いた時、電話が鳴った。」

(2) 従位接続詞「when」2: 「～したら」(「未来」における「同時」の意)

主節が「未来」や「命令」を表しているような場合、「when」などの「時」を表す副詞節の中の動作が「これから先の未来」のことであっても、その副詞節の中の述語動詞は「現在形」で表現されます。

(★「現在形4:『時』や『条件』を表す副詞節の中で『未来の事柄』を述べる場合」→P.114参照。)

例1: Please give me a call when you get home.

「あなたが家に着いたら私に電話をください。」

例2: We will find the answer when she comes back.

「彼女が戻ってきたら私達はその答えを見つけるだろう。」

(3) 従位接続詞「when」3: 「～するのに」「～する一方で」(「事実との対比・矛盾」の意)

例: Why do you ask the question when you already know the answer?

「君は既に答えを知っているのに、どうして君はその質問をするのですか？」